アマルティア・センの Capability 論と社会関係資本論

On the correlation between Amartya Sen's capability theory and Social Capital theory

早　野　禎　二*
Teiji HAYANO

キーワード：潜在能力　機能　社会関係資本
Keyword: capability　function　social capital

要約

アマルティア・センの「潜在能力」の概念と社会関係資本論の関連性を明らかにする。センは「生活の質」を「達成された福祉」ではなく「福祉を達成する自由」という観点から論じ、「潜在能力」論を展開した。彼は、「潜在能力」、すなわち価値ある機能を達成する自由が生活の質にとって重要であるということを強調する。本論文では、社会関係資本は「潜在能力」を構成している「機能」を生成させることを明らかにし、両者の関連性を論じていく。

Summary

The purpose of this paper is to clarify the correlation between the concept of capability in Amartya Sen's theory of Quality of Life and Social Capital theory. Sen advanced his capability theory, not from the perspective of achieved welfare, but the freedom of achieving welfare with regards to Quality of Life. He emphasizes that capability, that is the freedom of achieving valuable functions, is important for Quality of Life. This paper clarifies that Social Capital is able to produce functions which make up the capability that Sen discusses.

はじめに

センは、「生活の質」を論じるにあたって、「機能」という概念から出発し、生活とはこの「機能」すなわち「何かをすること」(doings) と「ある状態でいること」(beings) の組み合わせであると定義した。そして、「潜在能力」を「その人にとって達成可能な諸機能の代替的組み合わせを反映し、その人はその中から一つ選ぶことができる」ことであるとする。「機能」「潜在能力」と

＊東海学園大学経営学部経営学科

いうアプローチを使うことによって、センは、「達成された福祉」ではなく「福祉を達成する自由」という視点から「生活の質」を論じることができるとする。

本論文では、このセンの理論の「潜在能力」論と社会関係資本論を社会学的アプローチによって関連づけを行う。社会関係資本は、コールマンが述べているように、個人間の関係のなかに存在しているもので社会構造内における行為者の何らかの行為を促進するものである。従って社会関係資本も一つの財として取り扱うことができるのであり、他の財と同じようにそれは「機能」に転換され、「潜在能力」集合を構成する要素となることができる。社会関係資本を所有することによってその人の「潜在能力」は高まり、自分が価値があると考える生活、ライフスタイルを選択していくことができる「自由」を得ることができる。

社会関係資本は、時間の経過とともに、可変性があること、また空間性と視点からは、限定性、個別性、特殊性、文脈依存性という特性を持っている。また、社会関係資本から引き出される「機能」も時間の経過の中で変化していくことがある。また、社会関係資本が形成されると、そこからさらに外に社会関係が広がり、それが新たな社会関係資本となっていくという資本の増殖にもなぞらえる過程が進行していくことがある。時間の経過とともに社会関係資本が重層的に拡大していくことによって、その人の潜在能力が高まり「生活の質」が向上する。このような社会関係資本の特性はそれが社会関係に埋め込まれているものであるという特性から生じるものであり、社会学的なアプローチがなされることによって明らかになってくるものである。

センの「潜在能力」論と社会関係資本論を関連づけるもう一つの意義は、「生活の質」を社会関係の有無や量と質によって評価するという方法では、それがセンが論じている「福祉を達成する自由」をどの程度、反映しているものかが明確ではなく、社会関係資本という概念を使うことによって、それが明確化できる点にあると考える。

また、センの「機能」「潜在能力」という概念は、アリストテレスの「活動」「現実態」「可能態」の概念の影響があると考える。センとロールズとの違い、コーエンからの「機能」概念の批判の背景にはセンがアリストテレス哲学の影響を受けている点があると考えられる。論文では、アリストテレス哲学を整理しながら、センの理論の背景にあるものを理解し、センの「機能」概念が持っている哲学的・人間学的な価値の意味を考えていきたい。

以下、本論文は次のような構成で論じていく。1．では「生活の質」に関する先行研究として三重野の理論とイピッド・フェルス、ジョナサン・ペリィの理論を検討する。2．では、アリストテレス哲学における「活動」「現実態」「可能態」の概念の整理を行う。3．では、アマルティア・センの「生活の質」論を検討し、「機能」「潜在能力」の概念を整理し、「達成された福祉」に対置される「福祉を達成する自由」の意義を論じていく。4．では、社会関係資本の資本としての特徴を明らかにし、「潜在能力」論と社会関係資本との関連性について論じていく。また、社会関係資本を持つことがどのように「福祉を達成する自由」につながっていくのかを明らかにする。

1．「生活の質」に関する研究

「生活の質」に関する全体の研究について、三重野は次のように整理している。(1)

①経済的系譜

マクロ経済的には、国民所得、国民総生産の理論に関連するものである。この場合、物財の質的側面、生活関連資本、ストックによるさまざまな欲求充足という点が関連してくる。ミクロ経済学的には、財の欲求充足機能として効用概念が「生活の質」に関連するものとされる。

②当該社会システムの状態に着目するもの

クオリティ・オブ・ライフ、福祉、「豊かさ」に関連する客観的、実物的指標（死亡率、進学率、ひとりあたりの都市公園面積など）の体系を構築するものである。数量化の視点から社会指標と呼ばれ、福祉、生活の諸要因や当該社会システムの状態を認識、評価、それを制御するものである。

③心理学的ないしは社会心理学的な流れ

一般の人びとを対象にした生活意識を把握するための尺度（生活満足感や不安感）を展開するというものであり欲求の「質」的充足に関するものである。

④医療、看護学などの系譜

生命の選択や尊厳死、神聖なる生命、ターミナル・ケアといった考え方の関連でクオリティ・オブ・ライフに着目するものである。

⑤数量化、操作化の立場からの疾患の治療と評価するもの

生活の質のための要因を健康概念との関連で健康度の自己評価として把握する試みや、心理的要因として患者の主観的幸福感、満足感などについて尺度構成する方法がある。

⑥高齢者の「生活の質」に特定化したもの　老年学など。

三重野は、「福祉」と「生活の質」の関係について、次のように論じる。福祉とは「満足のいく暮らし、状態」「望ましさ」に関する観念であり、経済学的には、経済的厚生関数、効用、選考理論の側面から定式化されるともに、社会的価値、とりわけ福祉理念としての平等化との関連でも議論され、それを実現するための政策、制度、実践活動が福祉（とりわけ社会福祉政策、制度）とされることもある。(2)

他方、「生活の質」とは、そのような「福祉」の実現された状態を意味するが、それ自体には政策概念は含まれてはおらず、「生活者」の「質」的側面、「状態」という観点（究極的には個々人の生活経験のなかに存在する）に焦点が置かれていることが「福祉」概念と区別される点である。(3)

三重野は、センは、人と財とのかかわりを分析する経済学の伝統を継承しつつも、ひとの「機

能」にまで言及している点に大きな特徴があり、人と人との関係に第一義的に焦点を合わせる社会学的な考え方に近づいているとする。(4)

センは、「機能」は財や特性と、個人の利用関数（個人的要因、社会的要因）とがあいまって引き出されてくるとしているが、三重野は、財の利用関数を決める社会的・個人的要因のなかに生活様式が入れられるとし、センの理論への社会学的アプローチを試みている。生活様式とは、三重野によれば、広義には「生活過程における諸個人の物質（生活手段、自然環境）・制度・人間・社会意識に対する行為の様式・型」であるとされ、狭義には「生活手段をめぐる問題、その利用と配置が問題となり、当然、複数の手段の選択という問題、、、、、利用と配置の結果としての生活の変化という問題も取り扱う」とされる。また、生活様式は習慣・慣習、知識、技術、物財・サービス、組織、法律、家族形態、宗教などからなり、ヒエラルヒー、システムをなすことにより人々の行為の様式を規定する文化的な意味を担ったものとされる。(5)

また、三重野はセンの理論は、経済学から社会学的な方向を志向するようになっているが、そこで重視されているのは経済学的な「財」という概念であり、それが社会的にいかなる意味をもつかという点が議論の対象になってくるとする。社会学的に「社会的資源」を考えるとき、その概念は広くなり物的資源（経済学的財）、人的サービス資源だけでなく、関係的資源（権力、威信、影響力など）、文化的資源（知識、情報）なども対象になるとされる。関係的資源、文化的資源は、利用関数を規定する個人的・社会的要因のところに位置づけられるともに、財の文脈にも位置づけられるとしている。(6)

また、「人の機能」を考える場合、常に財や資源の観点から考えなくてはならないわけではなく、人の行動様式としての生活様式の多様化が「生活の質」を確保するということも考えられ、その限りでの財の分析も重要になるとし、「財」を含む生活様式のシステムについての議論が提起されるとしている。(7)

また、三重野は公共的政策は、ひとの「潜在能力」、「機能」を高めるためになされる必要があり、利用関数のための社会的要因（政策・行政情報）の基礎を整えたり、「潜在能力」と関係する財の選択の限界を拡大したり、「潜在能力」自体を広げることが重要になるとしている。(8) したがって、各種の政策、財の供給システムは、「ひとの潜在能力」「ひとの機能」を高める方向でなされる必要があり、そのための「平等」や「公正」の価値基準が重要であるとする。そして、アクセスビリティ、各種の財の補完、代替、トレードオフ、関連性の問題が重要となり、その組み合わせによる「ひとの機能」の実現が必要となってくるとしている。(9)

三重野が提起した論点は、センの議論と社会学の視点をつなぐという点において重要であると筆者は考える。筆者は、三重野が利用関数、あるいは財の文脈にも位置づけられるとした「関係的資源」の概念を社会関係資本の概念によって発展させ、センの理論に対する社会学的なアプローチを展開していきたい。

WHO の「生活の質」定義には、身体的領域、心理的領域、環境とともに、社会的関係があげられ、社会的関係には人間関係、性的活動、社会的支援が含まれている。これは、一般的な定義の指標である。

イピッド・フェルス、ジョナサン・ペリィは障害者の「生活の質」に関して次の５つの評価の次元をあげているが、そのなかに WHO の社会的関係に関係すると考えられる「社会的幸福」という項目が設定されている。(10)

○身体的幸福　・健康、体力、移動、安全。

○物質的幸福　・収入、住宅の質、プライバシー、所有物、食事、近隣環境、財産、安全、移送。

・移動へのアクセス、社会、仕事、教育、文化的活動への広がりを求めて機会があるかどうかで他の領域にも関連。

○社会的幸福　・個人的な関係、家族・家庭、親戚・友達、地域とのかかわり、受容・支援。

・人間関係はその関係の広がりやネットワークも重要であるが、それぞれの人間関係の質（親密さの度合いや援助、相互のやり取り、平等性）も重要。

○感情的幸福　・愛情、充足感、精神的ストレス、自尊心、社会的地位・尊敬、性感情、信念。

○生産的幸福　・能力、独立、選択と統制力、生産と貢献、仕事、家庭、余暇、教育時間を建設的に使うことができる能力、それに伴う個人の成長に関係するもの。

フェルス、ペリィの「社会的幸福」の概念は、障害者の「生活の質」について論じられる中で出てくるものであるが、それは障害者に限定されるものではなく、WHO の「生活の質」の指標のなかにも、社会的関係が入れられているように一般的な意味で、「生活の質」の評価基準の一つとして「社会的幸福」概念があると筆者はとらえる。

しかし、社会的関係を「生活の質」の指標の一つとした場合、そのことが、たとえば、安心感や信頼感、参加意識をもたらすという意味で「生活の質」の評価となっているのか、それともそのような関係があることが、その人に価値があると思う生き方を選択できる自由をもたらし、「潜在能力」を向上させるという意味での評価であるのか、その区別が明確になっていないと考える。本論文では、センの潜在能力論と社会関係資本論を関連づけることによって、社会的関係を所有していることが、「福祉を達成する自由」につながるものであるということを明らかにしていきたい。

２．アリストテレスの哲学概念

センの理論を見ていく前に、彼がその影響を受けたアリストテレスの哲学を整理していきたい。

アリストテレスは、『形而上学』のなかで、「活動」「働き」「現実態」「可能態」について論じている。アリストテレスによれば、生成するものは、すべてある原理にむかって、すなわち、その

終わりにむかって進行するとする。何かがそれのためにあるそれ（目的）はそのなにかの原理（目的因）であり、生成はその終わり（テロス）のためにである。(11)

「現実態」とは、「働き」（エルゴン）であり、終わり（テロス）である。(12)「現実態」とは何かの終わりであり、そのためにその能力（可能性）は修得される。(13)　「現実態」（エネルゲイア）とは、それ自らのうちにその終わり（目的）を含んでいるところの運動的な概念であり、現在進行形と現在完了形が同時的な過程としてあるものである。(14)　アリストテレスはこの「現実態」（エネルゲイア）について次のように述べている。

人はものをみているときに同時に見ておったのであり、思慮しているときに同時に思慮しておったのである。これに反して、何かを学習しているときはいまだそれに学習し終わっておらず、健康にされつつあるときに健康にされ終わっていない。よく生きているときに、かれは同時によく生きていたのであり、幸福に暮らしているときに、かれは同時に幸福に暮らしていたのである。(15)

ひとは歩行しつつあると同時に歩行して終わっておりはせず、またかれは家を建てつつあると同時に建て終わっておりはしない、そのようにまた、なにかが生成しつつあると同時に生成して終わっておりはせず、動かされていると同時に動かされ終わっておりはしないで、見ておったのと同時に見ているのとは（別のものではなくて）同じものがであり、また同じものが思惟していると同時に思惟していたのである。(16)

よく生きているときに、かれはまた同時によく生きていたのであり、幸福に暮らしているときは、かれは、また同時に幸福に暮らしていたのである。彼は生きておりまた生きておった。このように何か生成しつつあると同時に生成し終わっておらず、動かされていると同時に動かされ終わってはいない。(17)

他方、ディナミスとは、能力、可能性を意味し、「可能態」と呼ばれる。これは、他のもののうちにあり、または他のものとしてのそのものの自らのうちにあるところの、それの転化の原理（始動因）のこととされる。(18) アリストテレスは、質料と形相を区別する。木材と机でこの関係を考えみると、木材という素材から机が作られた場合、木材が質料にあたる。そして、そこから机という具体的な形となったものが形相にあたる。質料である木材のなかには、それが机に転化する原理があり、その意味で木材のなかにはディナミス（能力、可能態）があるとされる。そして現実に形（形相）を持つ「机」が「現実態」である。この場合、質料は「可能態」であり、形相は「現実態」を意味する。

この「可能態」と「現実態」の関係は、たとえば、次のような対比になる。すなわち、建築しうるものと建築しているもの、眠っているものと目覚めているもの、視力を持っているが眼を閉ざしているものと現に視ているもの、材料と材料から形作られたもの、未完成なものと完成されたものという関係である。(19) また、現に研究活動をしていない者も、研究することができる能力があれば、その者は「可能態」としての研究者であり、その能力を働かせ現に研究活動をしている研究者は「現実態」である。(20)

ディナミス（可能態）とは、エネルゲイア（現実態）とは異なり、あるものは存在することも可能であるが（現実には）存在しないことも許されるし、またそれが存在しないことも可能であるが（しかも現に）存在しているということも許される。たとえば、歩行することの可能なものであるが（現実には）歩行していないとか、逆に、歩行しないことも可能であるものが、現実にに歩行することができるということである。(21)

ディナミスには、理性に従って動かす「能力」があるという場合と、非理性的な意味での「能力」があるという場合があるが、前者の、すなわち、ディナミスが理性的な「能力」を意味するときは、そこに欲求または選択意志が働くものとされる。(22) すなわち、理性的な存在、すなわち人間は、可能的なものから理性に基づいて選択し、「活動」を行うのである。

以上、アリストテレス哲学における「現実態」「可能態」「働き」という概念について整理してきた。これは次に見るセンの「機能」「潜在能力」の概念に影響を与えたものである。また、センの「機能」概念に含意されている人間学的・哲学的な含意は、アリストテレス哲学からの影響である。

3．アマルティア・センの「生活の質」論

ここでは、センの「機能」「潜在能力」「福祉を達成する自由」という概念について整理し、センの「生活の質」論を概観していきたい。

センは、福祉（well-being）を人が自分にとって価値ある行為をする能力や価値がある状態になるという能力の観点からとらえ、人の「生活の質」は価値ある機能を達成する潜在能力という観点から評価されるべきであるとする。センは、「機能」という概念から出発するが、これはアリストテレスの影響を受けている。「機能」とは次のように定義される。

機能とは、ある人の状態の部分を示すものであり、特に人が生活するに当たってすることのできるもの、あるいはなることができるものを指す。(23)

「機能」とは、アリストテレスの概念との関連でいうと可能態としての「能力」から生成されてくる「働き」としての「活動」、すなわち現実態を意味すると考えられる。センによれば、生活

とは、この「機能」、すなわち、「何かをすること」（doings）や「ある状態でいること」（beings）の組み合わせである。[24]

また、「潜在能力 Capabilty」とは、「その人にとって達成可能な諸機能の代替的組み合わせを反映し、その人はその中から一つ選ぶことができる」こととされ、人の「生活の質」は、「価値ある機能を達成できる潜在能力」という観点から評価されるべきであるとする。[25] この「達成可能な諸機能の代替的組み合わせ」としての「潜在能力 Capability」の概念は、アリストテレス哲学におけるディナミス（可能態、可能性）に対応すると考えられる。ここから選ばれる「諸機能の組み合わせ」が「生活」とされるが、それがエネルゲイア（現実性、現実活動、現実態）に対応すると考えられる。

「機能」と「潜在能力」との関係は、数学的には次のように説明される。「機能」の空間における点は、N 個の「機能」を要素として表わされる。「潜在能力」は、そのような「機能」の空間における点の集合であり、そこからひとつだけ選ぶことができる様々な「機能」の組み合わせを表わす。「機能」の組み合わせはそのような空間内の一点であるのに対し、「潜在能力」はそのような点の集合であるとされる。[26]「潜在能力」とは「様々なタイプの生活を送る」という個人の自由を反映した「機能」のベクトルの集合であり、機能空間における「潜在能力集合」はどのような生活を選択できるかという個人の「自由」を表わすものとされる。[27]

センは「機能」として、非常に基本的ですべての人間にとって重要とされるもの、たとえば、栄養状態が適切、よい健康状態であることなどをあげ、それ以外のより複雑であるが広く価値を認められる「機能」として、自尊心を持つこと、社会の一員として生きることなどをあげている。[28] しかし、センは、価値ある「機能」の一般的なリストは提示していない。それは人によってそれぞれの「機能」に与える価値のウェイトは大きく異なるからであるとされる。

センは、「生活の質」を論じるに際して、平等とは何の平等かという問題を立てる。人の存在は多様であり、「機会の平等」だけでは、本当の平等を意味するものではなく、「自由の平等」という視点が必要になってくるのではないかとする。平等とは、ある人の特定の側面（例えば、所得、富、幸福、自由、機会、権利、ニーズの充足など）を他の人と同じ側面で比較することによって判断することができる。不平等の判断は、比較を行う変数の選択に依存している。経済学では、これは異なった人びとを比較するときにどのような「空間」を選択すべきかという問題として現れる。異なった空間（例えば所得、富、幸福など）における不平等の特徴は、人間の多様性のために異なったものとなり、ある変数に関して平等であったとしても、他の変数で見た場合にも平等であるとは限らない。[29]

「機会均等」という概念は特定の手段が等しく利用可能であるとか、特定の障壁や制約が等しく適用、あるいは適用されないという制限的な意味で用いられる。このような「機会均等」はセンによれば、全般的な自由を表わすものではない。人間は基本的に多様であり、相続した資産、

自然的・社会的住環境などの外的な特性、年齢、性別、病気に対する抵抗力、身体的・精神的能力などの個人的な特性においても異なっている。標準的に定義された「機会均等」の視野に入ってこない様々な手段（所得や富など）の存在がある。(30)

機会が平等に与えられているとき、非常に不平等な所得分配を生み出す可能性がある。平等な所得分配は相当な資産格差を伴っているかもしれない。平等な資産分布は、非常に不平等な幸福と共存しているかもしれない。平等な幸福がニーズの充足の面で大きな格差を持っている場合もある(31)従って、「真の機会平等」は、「潜在能力の平等」でなければならないとセンは述べる。

ロールズは、基本財に焦点をあてたが、センは、ロールズの影響を受けながらも、同一の基本財（所得、富、機会、自尊心の社会的基礎など）を持っている場合でも、善（望ましいもの）と考えることを遂行する自由な異なることがありうるとして、ロールズのアプローチに批判を加える。すなわち、基本財によって平等を評価することは、自由の程度の評価よりも、自由の手段を優先することになるとする。(32) センは、平等の問題は、自由という観点から論じられるべきであるとする。すなわち、真の平等は、「福祉を達成する自由」の問題であり、潜在能力の視点から論じられなければらないとする。

センは潜在能力アプローチは個人の効用、快楽、幸福、あるいは欲望の充足に焦点を置く功利主義的立場、消極的自由的立場、ロールズの正義論に見られるような「基本財」の保有に焦点を置くもの、資源の平等に焦点を置くドウォーキンなどと立場とは異なるものであるとしている。(33) センによれば、厚生主義や功利主義的なアプローチは、快楽や幸福や欲望といった心理的特性によって定義される個人の効用にのみ究極的な価値を見出すが、これは自由を無視し、成果のみに注目すること、心理的尺度では測れないような成果を無視するという点で制限の強いアプローチであるとセンは批判する。センは、効用が個人の福祉を表わす限りにおいて、この手法は極めて限定的に福祉を説明するものに過ぎず、「福祉を追求する自由」やその他の目的に対しての注意を払っていないと批判する。(34)

「生活の質」を心理的特性によって定義される個人の効用によってのみ評価することは、たとえば固定してしまった不平等が存在するときには限界が生じる。永続的な逆境や困窮状態にある人は、その状態を嘆き悲しみ、不満を持ち続けることはいかず、その状況とどのように折り合いをつけてうまく付き合い、少しの変化でもありがたく感じ、不可能なことやありえないことは望まないようになる。(35) この場合、心理的特性による「効用」による評価では困窮の程度が十分に反映されたものとはならない。従って、その人の「生活の質」は、「達成された福祉」ではなく「福祉を達成する自由」すなわち「価値ある機能を達成できる潜在能力」という視点から考えられなければならない。このような視点は、階級、ジェンダー、カースト、コミュニティに基づく持続的な差別がある場合は重要な意味を持っているとセンは述べる。(36)

潜在能力アプローチが、功利主義的評価（厚生主義的な評価）とは異なるのは、人間のさまざ

まな行為や状態を（単に効用を生み出すから、あるいは生み出す効用の程度に応じてではなく）それ自体大切なものとみなす余地を残している点であるとされる。またこのアプローチは、他のアプローチと違い、生きるための手段や自由のための手段、たとえば実質所得、富、富裕、基本財、資源などに直接的な重要性を付与しない。(37)

「潜在能力」は「様々なタイプの生活を送る」という個人の自由に関連してくるが、それは自由とは何か、そしてなぜ必要なのかという問題と関連してくる。センは、自由というのは人の福祉の達成にとってそれ自体に価値があるものであると考える。自由に行動でき、選択できるということは福祉に直接つながるものである。選ぶということは生活の一部であり、「Xをすること」と「Xをすることを選び、それを行うこと」は区別されなければならない。(38) 選択するということは、それ自体生きるうえで重要な一部分である。重要な選択肢から真の選択を行うことができる人生はより豊かなものである。従って、センは、善き社会構造においては、自由は手段としてではなく、本質的に自由なものと見なさなければならないとし、「善き社会」とは「自由な社会」であると論じている。(39)従って、センは福祉は達成されたものによってではなく、それを達成する自由がどれだけあるかによって評価されなければならないとする。

センが「機能」「潜在能力」という概念を理論の中心に据えるのは、人間の行為や状態、それ自体を大切なものとみなすためであるが、それは、人の「自由」の問題に関わるものである。このセンの理論や思想の背景にあるのがアリストテレスの哲学思想である。アリストテレスの「活動」「行為」の概念は、人の能力がそこに発現しているものであり、それ自体が価値あるものである。それは、何かの手段としてあるのではなく、その中に「終わり」（目的）を含んでいる運動的なものである。これはアリストテレスによってエネルゲイア（現実態）と呼ばれ、「可能態」から人間の理性的な力により選択されるものであった。センにとって「自由」「潜在能力」が重要となっているのは、アリストテレスの哲学からの影響があるからであり、それがロールズらの他の論者との立場の違いをもたらしている。

自由が福祉につながるのは、自由が増すと選択肢が増えるからではない。センは、選択肢がただあればいいというわけではなく、そこに価値や関心が関与していなければならないとする。「機能」のうちであるものは重要であり、他のものは取るに足らないという選択が必要になる場合に大切になるのはその根底にある関心や価値に注目することである。(40)

センは、断食するということもその人にとって価値のある「機能」となるとしている。(41)「機能」としての「断食すること」は単に飢えていることではない。現実に「食べていない」という状態は同じであっても、それが食料が十分あるという条件の下で、その人が、断食に価値を見出して、「食べないでいる」ということを選択した場合と、もともと食料がないために「飢えている状態」にあることとは意味が違うとセンは考える。前者の場合には、その人が自らの意思で選択した価値ある「機能」である。しかし、後者は、このような価値ある「機能」を意味するもので

はない。もし、基本財の平等ということが原則とされ、仮に、食糧の配分において平等性が考慮された政策がされたとしても、断食することに価値を置いている人にとっては、それは、意味があるものではない。センが、「達成された福祉」とは別に「福祉を達成する自由」という視点が必要であると述べているのはこのような点を考慮しているためである。

センは、選択することはどのように選択されても同じではないし、人の福祉はその生活様式がどのように生じるようになったかということにも依存しているとする。(42) その人は選択可能な幾つかの生活様式から、価値ある生活様式を選択した場合、その人は、「福祉を達成する自由」がある。それは、可能性のある諸福祉を享受する自由を意味する。このさまざまな生活を送る自由は、潜在能力集合に反映されているものである。

以上、センの理論を整理してきた。次の章ではセンの「潜在能力」の理論の中に社会関係資本論を位置づけていきたい。

4．社会関係資本論と潜在能力論

センの議論は、前章で見てきたように、「機能」、「現実態」「可能態」というアリストテレス哲学の影響を受けながら、「生活の質」を「潜在能力 Capability」の観点から論じるものであった。このセンの議論は、社会学的にはどのような意味を持っているであろうか。三重野は、センの議論を社会学として展開した場合、関係的資源が、「財」が「機能」に転換される利用関数となったり、「財」の文脈に位置づけられることができるとしているが、筆者はこの三重野の視点を社会関係資本という概念によって発展させ、センの理論に対する社会学的なアプローチを行っていきたい。

社会関係資本論とは、コールマンによれば、物的資本や人的資本と異なって、個人間の関係のなかに存在しているものである。それは行為者自身に宿ったり、物質的な生産手段に宿るものでもない。(43) コールマンによれば、社会関係資本は、単一のかたちをもつ存在ではなく、いくつかの異種があるが、それらに共通する要素が二つある。ひとつはすべての社会関係資本は社会構造という側面を備えているということ、また、すべての社会関係資本が、個人であれ団体という行為者であれ、その構造内における行為者の何らかの行為を促進するということである。他の資本形態と同じように社会関係資本は生産的な活動を促進し、それなしでは不可能な一定の目的の達成を可能にする。(44) 例えば、信頼性や信頼が内部に遍く存在している集団は、そのような信頼性や信頼がない集団よりもずっと多くのことを成し遂げることができる。

コールマンは、この社会関係資本の形態を３つあげて整理している。(45) 第一のものとして恩義や期待がある。これは社会的環境の信頼性に依存している。この例として、無尽講、頼母子講をあげている。第二の形態として、「社会関係に内在する情報に対する潜在力」があげられる。情報は行為をもたらす基盤となる。たとえば、最先端の流行には関心はないが、流行に遅れないた

めに、友人を情報源としている例をあげている。第三のものは、制裁を伴う規範である。すなわち、集合体内における指令的な規範は社会関係資本の非常に重要な形態であるが、それによって、人は自己利益的行動ではなく、集合体の利益のために行動できるようになる。そのような規範は、「社会からの支持、地位、名誉、その他の報酬によって強化」される社会関係資本である。

次に見るパットナムは、社会関係資本は政治的、経済的なパフォーマンスと関連しており、政治的民主主義の問題と論じている。パットナムはその著『哲学する民主主義』において、社会関係資本を「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」(46)と定義している。

パットナムによれば、市民的積極参加のネットワークとして具体的に「近隣集団、合唱団、協同組合、スポーツ・クラブ、大衆政党などのような活発な水平的交流」をあげている。この市民的積極参加のネットワークは、社会関係資本の本質的な形態とされる。そして、「共同体のこの種のネットワークが密になればなるほど、市民は相互利益に向けて協力できる」(47) ようになる。パットナムは、高い水準の政治的、経済的パフォーマンスは、地域における社会関係資本に関連していること、すなわち、単に功利主義的な関係ではなく、信頼と規範に基づく集団やネットワークが地域社会で積極的に活動していることに下支えさせられていると論じている。

リンは、社会関係資本論を「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源」と定義している。(48) 社会関係資本論には、市場の場で見返りを期待して社会関係に投資するという前提がある。(49) この社会的ネットワークに埋め込まれた資源が、ある行為によってもたらされた成果を高めるのは、情報の流れの促進効果、影響力、信用証明、補強（社会的アイデンティティと承認の強化、特定の資源への公的権利）があるからである。(50)

また、リンは、個人がアクセスし活用できる資源には、個人的資源と関係的資源の二つがあるとする。個人的資源は、個人が保有する資源であり、物質的な財や象徴的な財（たとえば学位）があり、関係的資源とは、個々人の社会的つながりを通じてアクセスできる資源である。個々人は自らの社会的なつながりの広さと多様性に応じて異なった関係的資源を有する。(51) また、社会関係資本は行為者がその関係またはネットワークのなかの資源に気づいており、特定の資源を得るために選択を行う必要があるということを示している。しかし、行為者はその存在に気づかない場合もある。したがって、行為者によって資源があると認知された紐帯や関係のみ資本化が可能になる。(52)

また、稲葉は、社会関係資本論は公共財、私的財、クラブ財の次の３つに分類できるとしている。(53)

①私的財としての社会関係資本　個人間ないしは組織間のネットワーク。

②公共財としての社会関係資本　社会全般における信頼・規範。

③クラブ財としての社会関係資本　ある特定グループ内における信頼・規範（含む互酬性）。

以上、社会関係資本に関する研究を整理してきたが、次に社会関係資本がセンの理論のなかにどのように位置づけられるのか論じていきたい。

センの「財」から「機能」への転換に際して働く利用関数のなかに、三重野は生活様式をあげているが、この利用関数の中に社会関係資本を入れることもできると考える。ある財があって、それを「機能」に転化する際に、その人が持っている社会関係資本が利用関数として働くことがあると考えられる。しかし、ここでは、論点を絞るために、社会関係資本を「財」の概念に限定して、「潜在能力」論との関係について検討をしていきたい。

社会関係資本という「財」からもセンの「することができる」（doings）「なにかであること」（beings）という「機能」が生成してくるとするなら、社会関係資本を保有していることは、その人の潜在能力を高めるものとなり、「福祉を達成する自由」という意味での「生活の質」の向上につながる。

たとえば、ある人が信頼・互酬性という社会関係資本をもっているとする。それは学校の昔の同級生仲間かもしれないし、地域の人といっしょにやっている野球チームの仲間かもしれない。ある時、その人が失職し、仕事を探す必要が生じたが、その人は、その仲間から「仕事」の情報を得ることができ、再就職できたとする。この場合、その人にとって、そのような仲間との関係があったことが社会関係資本の所有を意味し、その人の「潜在能力」を高め、仕事を見つけ働くという「活動」を行うことができるようになった。

一般に、社会関係資本となるネットワークや集団を多く持っているほど、「潜在能力」は高いものになると考えられる。友人仲間、会社の同僚、組合員メンバー、地域の隣人、親族、趣味のサークルなど、さまざまな集団やネットワークが社会関係資本となりうる。その社会関係資本が多いほど「潜在能力」が増し、その人の「生活の質」の程度を高める。

また、別の例を考えてみたい。ある障害者がセルフヘルプグループに参加したとする。そこで活動していく中で、仲間との信頼関係が生まれ、助け助けられるという互酬的な関係が生まれたとする。彼のセルフヘルプグループへの参加動機は、一人でいるのではなく同じ障害者の仲間や友達がほしいという漠然としたものであったが、たまたまそのグループの中で、自分がしたい趣味活動を一緒にしてくれる仲間を見つけたり、趣味に関わる情報を得ることができ、その趣味が実際にできるようになったとする。その場合、そのセルフヘルプグループは、その障害者にとって社会関係資本としての役割を果たしたのであり、それを通じて自分がしたいと思うライフスタイルを獲得することができたと理解することができる。この場合、その人にとってそのセルフヘルプグループは、社会関係資本としての役割を持ち、その人の「潜在能力」を向上させるものとなっている。

それでは、この社会関係資本という財は、他の財と比較してどのような特徴を持っているのか

が次に明らかにされなければならない。社会関係資本とは、物的資本や人的資本とは異なり、人と人との関係に埋め込まれた資源に基づくものである。このような特徴を持つ社会関係資本の特徴を明らかにしていくためには社会学的なアプローチが必要になってくると筆者は考える。

社会関係資本の特徴を明らかにするために、貨幣資本との比較を行っていきたい。貨幣資本は、社会関係資本に比べ、通用性と普遍性という特徴があると考えられる。貨幣はさまざまなものに交換可能である。他方、社会関係資本は、貨幣資本に比して空間的・時間的な制約性、限定性という特性があると筆者は考える。もちろん、財の種類は様々であり、社会関係資本に近い財の特性を持つものもあるであろうが、貨幣資本と比較において明らかになる社会関係資本の特徴は以下のようなものであると考えられる。

まず、時間性の問題について考えてみたい。一般に資本からアウトプットされてくる過程は、時系列的な時間軸の中で生じるプロセスとして理解できる。同じように社会関係資本からアウトプットされる過程も時間軸のなかでのプロセスである。その場合、時間の経過の中で、その社会関係が一定であり続けることもあるが、途中でその関係が変化し、その社会関係が資本としての役割を持たなくなってしまうこともある。これは、社会関係資本が社会関係に埋めこまれている財であるという特性に由来するものと考えられる。社会関係は、期待の相補性に基づく関係であり、常時性と継続性を持っているが、しかし、時間の経過に伴って変化する動的な性格も持っているものである。従って、社会関係資本は時間の軸の中においてみると生成と消滅という意味をも含めて変動性がある資本であると言える。

たとえば、ある社会関係が資源となることを人が認知しそこにアクセスしたとする。しかし、その社会関係、たとえば組織やグループやネットワークは常に固定的な関係にあるのではない。時間の経過とともに組織やグループの社会関係は変化していく。社会関係があるパターンにある時、それは資本となり、そこから「機能」が引き出されるが、そのパターンが変化することによって、もはやその社会関係は資本としての役割を持たなくなり、そこから「機能」を引き出すことができなくなることがある。

社会関係資本の一つの要素として「信頼」があるが、当初はその社会関係は「信頼」関係としてあったが、時間の経過の中で社会関係のパターンが変化し、「信頼」関係が失われてしまうケースが想定可能である。たとえば、仲の良かったグループや仲間意識のあった組織が、そこでの社会関係のパターンが変わることで、その信頼関係が失われていくことがその例としてあげられる。その逆に、同じ組織でも時間経過の中で社会関係のパターンが変わることによって、当初はその社会関係は社会関係資本の役割を持たなかったものが、社会関係資本となっていくということも考えられる。

パットナムは、社会関係資本とネットワークの水平性の関連を論じ、南イタリアに比べ、北イタリアに水平的ネットワークの傾向があることが民主主義的・経済的なパフォーマンスを高めて

いると論じているが、一つの組織やグループも、ある時は水平的な関係であっても、それが時間の経過の中で何らかの要因が働いて垂直的な関係に変化していくことはありうることであり、社会関係が社会関係資本となるかどうかは、時間軸の中で考える必要がある。このような変動性は、貨幣資本の場合にもあると考えられるが、社会関係資本に比べ低いと思われる。

また、信頼や互酬性という形をとる社会関係資本の継続性が担保されたとしても、そこから引き出される「機能」が変化していく場合があると考えられる。この例について次のような場合を考えてみたい。その人が、あるグループに参加したのは、最初は、趣味の情報などを得る目的であった。しかし、途中でその人が仕事をしなければならなくなって、そのグループから仕事の情報を得て、働き始めることができたとする。この場合、そのグループは、その人にとって信頼関係や互酬性をもった社会関係資本として継続していることには変わりがないが、時間の経過の中でその人に当初、得ることを期待していたものとは別の「機能」をもたらしたことになる。

あるグループがある人にとって社会関係資本としてある時、その時々で、どんな「機能」をそこから派生しうるかということは、時間の経過に伴い、そのグループメンバーの変動、そのグループの集団構造の変化、個々のメンバーが持っている外部のネットワークの変化などによって可変性があるものと考えられる。また、そこから「機能」を引き出す人が、どのような「機能」に価値をおくかは、時間の流れの中で変わってくることがある。最初は、そのグループを趣味仲間を求めて入ったとしても、途中、失職して、再就職のための情報が必要となり、そのグループ仲間の情報が重要になる場合などがその例にあたるであろう。

それは、当初の時点では予測不可能なことである。しかし、その人がグループに参加しそこで関係をもっていることが、信頼や互酬性、情報、ネットワークという資本を保有していることになり、そこからその時々で必要となった「機能」を引き出すことができる。従って、その社会関係が、信頼と互酬性という社会関係資本として継続している限りにおいて、それはその人の潜在能力を構成する。しかし、その社会関係が持っていた信頼と互酬性が時間とともに失われていった場合、それは、潜在能力を構成するものではなくなる。このような不確実性が社会関係資本にはある。

社会関係資本を貨幣資本と比較してみると、貨幣価値の変動があるにせよ、貨幣資本は、社会関係資本と比較した場合に安定性があると考えらえる。他方、社会関係資本は、時間系列のなかで変動性、予測不可能性を持っていると考える。この時間性と社会関係資本、「潜在能力」の関係の問題は、現代の社会が、伝統的な社会とは異なり社会の変動性、流動性が高くなり、安定的な社会関係が継続しにくくなっているという特徴を踏まえて、今後、検討されていかなければならない問題であると考える。

筆者は、社会の変動性が、社会関係資本の生成にプラスに働くときと、マイナスに働くときがあると考えるがこの点はまた次の課題としたい。時間性の問題については、他の財における時間

性の問題と社会関係資本におけるそれとの相違についてもまた検討されていかなければならないと考える。

次に、社会関係資本が時間の経過の中で、次なる社会関係資本をもたらすというプロセスについて考えていきたい。ある人が、ある社会関係を資本とし、そこからの情報や人脈を通じて、また別の社会関係にアクセスでき、そこでの関係を新たな社会関係資本とすることができたとする。さらに、その人は、そこからの情報や人脈を通じて、また新たな社会関係を広げ、それを社会関係資本としていくことができたとする。その人の社会関係の広がっていくと、そのなかで人の重なりも生まれ、関係が重層的になっていく。

このような社会関係資本の時系列的なつながりと拡大は、その人の「潜在能力」を向上させ、選択可能な選択肢を広がり増やして、「生活の質」を高めると考えられる。資本が新たな資本を産むという資本の増殖過程は、社会関係資本の場合も、一つの社会関係資本が次なる社会関係資本をもたらし、その人の総体としての社会関係資本が増加していく過程になぞらえることができるのではないかと考える。この場合、その人がどのような社会関係にアクセスできたかによってその後の社会関係資本の広がりに影響があると考えられる。アクセスした社会関係が閉鎖性を持っていた場合、それ以上の広がりはなく、社会関係資本が拡大していくことに歯止めがかかる。その社会関係が開放的であるならば、それが次なる社会関係資本の形成につながり、その人の社会関係資本量を増やしていくであろう。どのような要因があるときに、このような時系列的に社会関係資本が連鎖拡大していくのか、その誘因となる人間、あるいは社会的資源とは何か、そこに偶然性やハプニング性、リスク性がどのように働くのか、これらの問題について今後、研究されていかなければならないと考える。

センは、潜在能力集合は直接に観察可能ではなく、いくつかの仮定に基づいて作り上げられたものであるとする。センは、潜在能力集合全体に関する情報認知の問題があることを認めながらも、それをデータ制約の問題としてとらえ、理想的状況において潜在能力集合全体は確定可能なものとらえている。しかし、筆者は、時間という軸の中で「潜在能力」の問題を考えてみると、潜在能力集合の構成要素も変化していくことによってその集合全体も変化していくのであり、その変化に際して不確実性、予測不可能性、偶然性が働くことがあると考える。しかし、筆者は、この不確実性や偶然性を否定的にのみとらえているわけでなく、予測不可能性であるがゆえに新奇性や革新性をもたらす可能性があると考える。リスク性、偶然性、ハプニング性はリスク管理、リスク回避の視点からだけでなく、新たな革新と飛躍をもたらすチャンスとしてとらえることも重要であると考える。「潜在能力」は確定されうるものであり、認知可能性の問題があるだけだと考えるのではなく、予測不可能性、偶然性やハプニング性によって変化していくものととらえた方がよいと考える。この点は特に人と人との関係に埋め込まれている社会関係資本と「潜在能力」の関連を考えるうえで重要なことであると考える。

次に社会関係資本と空間性の問題について考えていきたい。筆者は、社会関係資本は、貨幣資本と比べて、空間的な限定性、特殊性、個別性という特徴があると考える。たとえば、ある人が人脈やコネから情報を得たり、互酬的なやりとりがあるとした場合、その人は社会関係資本を利用していると言えるが、それが有効な範囲は限定的、あるいは個別的であると考えられる。コミュニティのつながりが社会関係資本となる場合においても、それが有効な「機能」となる範囲は空間的な限定性を持っていると考えられる。

空間性の問題は、「地域」や「場所」の問題、あるいは「土地」「風土」の問題にも関連してくる。さらには、空間性の視点から考えるとき、その空間内における歴史や文化や習慣、伝統、生活様式の問題にも関連してくる。これらが、社会関係資本の生成やそこからの産出されてくる「機能」にどのような影響を与えるのかについても検討が必要である。これは三重野が論じている財が「機能」に転換する場合の利用関数の問題に通じる。

また、社会関係を地域のような空間的な限定された領域でとらえるか、その空間的な限定性を超えたネットワークとしてとらえるかは議論が分かれるところであろうが、どちらに重点を置いて考えるかによって社会関係資本の位置づけや役割も異なってくるものと考えられる。いずれにせよ、社会関係資本と空間性の関連を論ずるとき、限定性、極域性、特殊性、部分性、個別性、あるいは文脈依存性という視点が必要になってくると考える。この点も通用性、普遍性、匿名性が高い貨幣資本の特徴と対比される点である。

以上、貨幣資本との比較で、社会関係資本の時間的・空間的限定性という特徴を論じてきたが、それは、資本から引き出される「機能」の質を比較するものではなく、また、貨幣資本と社会関係資本の優劣を問題しているものでもない。社会関係資本が他の資本と比べてどのような特徴を持っているかを明らかにするために社会学的なアプローチが必要であるというのが筆者の見方である。社会関係資本とそこから引き出される「機能」は、他の資本や財から引き出される「機能」とどのような質的な違いがあるのか、そのことが「潜在能力」や「生活の質」の問題にとってどのような意味があるのかという問題設定があることを指摘したい。

この論文では、社会関係資本を財という側面に限定して論じてきたが、三重野が展開している利用関数の一つとして社会関係資本をとらえることも可能である。その場合でも、社会関係資本の特徴がどのように「財」の「機能」への転化の過程に影響を与えるのか、他の「財」と比較して論じていくことで、センの「潜在能力」論における社会関係資本が果たす役割と位置がより明確になってくると考える。

社会関係資本があることが「潜在能力」となるという立論を立てたとき、どのような要件があるとき社会関係資本が成立し、どのような要件が働いたときに、その社会関係資本が「機能」に転化するのか、社会学的な視点から今後研究がされていかなければならないと考える。

すでに研究が進んでいる社会関係資本となる社会関係の構造の問題、社会関係の閉鎖性と開放

性という視点とともに、その人の社会関係資本の形成を促進する媒介者、援助者、あるいは利用可能な資源が存在するかどうか、その人が生活している空間（地域性）がどのような特徴を持っているか、さらに経済的要因、制度的な要因などの諸要因がどのように影響するか明らかにしていく必要がある。特に制度は、社会関係資本の形成とその連鎖的拡大を促進する場合もあれば、阻害要因となることもある。三重野は公共政策と社会関係資本の形成の問題について論じているが、制度と社会関係資本の関係についても、さらなる検討が必要である。

そしてこのように分析されてきた社会関係資本の特徴から、それから産出されてくる「機能」が他の種類の資本から産出されてくる「機能」と比較してどのような特質を持っているのかが明らかにされなければならない。また、その「機能」は他の資本から産出されてくる「機能」と代替可能なものなのか、それとも補完する役割を持つのか、あるいは、社会関係資本からのみ産出される「機能」があるのかということも明らかにされなければならない。もし、社会関係資本からのみ産出され、他の資本によっては代替不可能な「機能」があるとしたら、それは「潜在能力」のなかでどのような役割と位置を占めるのかが明らかにされていかなければならない。また、社会関係資本が他の資本や財とどのような関係にあるのかという点も「潜在能力」を考えるうえで重要であると考えるが、そこに社会学的な視点が介在することによって、この点が明確になっていくのではないかと考える。これらの点は今後の研究課題である。

筆者がセンの理論に社会関係資本論を関連づけるもう一つの意味は、福祉、「生活の質」における「自由」という問題を考えるためである。1．で見たように、「生活の質」を規定する領域の一つとして「社会的幸福」という領域がある。すなわち、個人的な関係、家族・家庭、親戚・友達、地域などの関係の広がりやネットワーク、そこでの人間関係の質（親密さの度合いや援助、相互のやり取り、平等性）がその人の「生活の質」を規定する一つとなる。

このような見方に対して、筆者は、このように定義され、測定された「社会的幸福」が「達成された福祉」の程度を表わしているか、それとも「福祉を達成する自由」の程度を表わしているのかは明確ではないと考える。すなわち、その人の社会関係を「生活の質」の評価の一つの指標とする場合、その社会関係があること自体が何らかの効用や心理的な満足感をもたらしていることを「生活の質」の評価としているのか、それとも、その社会関係を社会関係資本として、その人の選択可能性、すなわち「潜在能力」を高めるという意味で「生活の質」の評価対象としているのかが明確ではない。

「生活の質」の指標としてその人の社会関係と主観的な満足度を使い、それを評価する場合、それは結果を意味するものであって、それがどのような経過を経て達成されたかについては問題とされていない。それは、その人の意志によって選択して得たものかもしれないし、与えられたものかもしれないが、それは同じものとして扱われる。

筆者はセンの「福祉を達成する自由」という観点が重要であると捉えるので、「生活の質」にお

ける社会関係の問題を社会関係資本の視点から考えていきたい。「福祉を達成する自由」という観点は、障害者や貧困層にとって重要である。それらの人々は、外部から必要であると判断された財を受け取ることで満足してしまうことがある。そこには依存関係が成立し、一見、「生活の質」が高くなったように思われるが、実際には、それは、その人から、本当に価値があると考える生活を選択する自由と意志を奪ってしまっていることがある。いわゆる「パターナリズム」の問題がそこにはある。

たとえば、施設などで、利用者の「生活の質」を「豊か」にするために職員が考えた趣味のプログラムがあるとする。利用者は、毎日の生活のなかでその趣味のプログラムに参加することによって「楽しみ」の時間を持つかもしれない。しかし、それは自分で選んだものではないし、選べる選択肢があるとしても、職員が選んだものの範囲を超えることはない。そこには「達成された福祉」はあるかもしれないが、センが重視した「福祉を達成する自由」はない。センは、選択肢がただあればいいというわけではなく、そこに価値や関心が関与していなければならないとする。センは、「機能」のうちであるものは重要であり、他のものは取るに足らないという選択が必要になる場合に大切になるのはその根底にある関心や価値に注目することであるしている。センが、「効用」と区別して「機能」という概念を使用したのは、そこにアリストテレスの哲学にまでさかのぼる人間的、哲学的な意味を込めているからである。

与えられたプログラムがあり、それ以外に適当な選択肢がなくてその趣味活動をやる場合においても、それは確かに「活動」であり、それは「楽しみ」となるかもしれない。しかし、その人が本当にしたい生き方を、このような施設のプログラムは与えているのであろうか。それはセンが批判したようにただ選択肢を多くしただけで、人として価値ある「機能」の実現にはつながっていないのではないだろうか。ここで人間的な生き方を本当に実現するとはどのようなことかが問いとして立てられなければならない。

同じ内容の趣味の活動をしているとしても、次のような過程をその人が経てそれを達成した場合は、それを与えられて行っている場合とは違った意味を持つ。ある障害者が、ある趣味活動に関心を持ち、それをしてみることが自分の生きがいになると考えるようになった。かれはそのために情報を集め、そのような趣味活動ができる仲間を求めて、セルフヘルプグループにアクセスし、メンバーとして活動するようになった。そしてメンバーとの間に信頼関係が生まれ、互酬的な関係が成立し、そのセルフヘルプグループが彼にとって社会関係資本となった。彼はそのセルフヘルプグループから趣味活動を行うための情報や仲間を得たり、メンバーの知り合いでグループ外でその趣味に関心がある人を紹介され、趣味活動の仲間を見つけて活動できるようになった。彼は、また、そのセルフヘルプグループのメンバーになることによって、就労の情報も得ることができた。それは当初の目的とは異なっているが、参加していく中でそのような情報も得ることができた。彼は、セルフヘルプグループという社会関係資本を得たことによって、趣味活動に専

念するという選択もできるし、就労をしながら趣味活動を並行して行うという選択もすることができるようになった。このように、その人は、そのセルフヘルプグループを社会関係資本とすることによって、「潜在能力」を高め、趣味活動をしながら生きるというライフスタイルを選ぶことができるようになったのである。さらに、就労しながら趣味活動をするか、それとも趣味活動に専念するかという選択も可能になった。このような過程には、最初から与えられものに従って生きるのではなく、自分でその時々で行動し、そのなかで選択肢を増やし、自分がしたい生き方を選んでいけるという「自由」がある。この場合、趣味活動が達成されたことのみで、その人の「生活の質」を評価するのではなく、そこに至る過程のなかに、自分のしたい生き方を選択していく「自由」があったこと自体を「生活の質」の評価とすべきであるというのがセンの立場である。センが「人の機能」の実現には人間学的で哲学的な意味がなければならないとしているのは、このような例を考えてみるとよく理解できる。この障害者は、趣味活動を行えるようになったということよりも、それを探していく活動の過程そのものが価値ある生き方になっていると考えるべきであろう。センが「達成された福祉」ではなく「福祉を達成する自由」の意義を強調するのはこの意味である。

施設のプログラムには、そのような趣味活動がなく、仕方なく、選べる範囲で選んだとしてしても、その人はどこか与えられたものをやらされていると感じるであろう。仮にその趣味活動が用意されていたとしても、それは「達成された福祉」かもしれないが、センの「福祉を達成する自由」ではない。施設で組まれるプログラムの一つ一つが優れたものであったとしても、それは、その人にとって価値ある「機能」をもたらすものではないとしたら、それは単に選択肢が増えたことしか意味しない。「生活の質」を「達成された福祉」によって測ると、この問題が見えてこないということになる。

このようなセンの視点はアリストテレス哲学の影響下にあると考えられる。アリストテレスの「活動」「行為」の概念は、人の能力がそこに発現したものであり、それ自体が価値あるものであるという考え方が含まれている。それは、何かの手段としてあるのではなく、その中に「終わり」（目的）を含んでいる運動的な概念である。それは運動的で、現在進行形と現在完了形が同時なものとしてあり、それ自身になかに目的を持っている。同じくセンの議論は、達成された結果ではなく活動の過程のなかに人間が「生きる」という価値を見るものである。

この問題は、次のセンの「機能」概念をめぐる議論と関連してくる。すなわち、センの論じる「機能」とは何か、それは、「効用」概念とどのような点において区別されるのかという問題である。センはローズルの基本財の平等を論じる立場は、手段の平等を意味するものであって、真の平等は、自由の平等の視点から論じられなければならず、そのために基本財と区別される「機能」概念が必要になってくるとしている。これに対して、ロールズは、彼の「基本財」という概念の中に、センが論じている「機能」という概念はすでに含まれていると反批判をしている。

また、コーエンは、センが「福祉の中心的な特性は、価値ある機能を達成する能力である」という表現をとるとき、その「潜在能力」の概念にセンは、積極的な運動や行為を連想させるようなアスレティシズム（athleticism）（運動能力）のニュアンスを与え、行為によってその可能性をフルに生かすマルクス主義的な人間像に関連づけているとしている。しかし、それは福祉における自由や行為の意味が過大に評価されてしまうとしている。(54) センは「断食する」ということも「機能」とし、「潜在能力」の中に位置づけている。しかし、コーエンは、それは自由ということにあまり多くのことを含ませすぎていると批判する。「飢えからの自由」が「潜在能力」として扱われているが、飢えからの自由は良い栄養状態であるということに等しく、それは断食中の金持ちがもつ選ぶ能力と同一ではないとコーエンは述べる。(55) コーエンは、「私が送っている生活」というのは、私が「その『やり方』や『生き方』においてどのような成功を収めているか」ということと同義ではなく、それを獲得することに文字通り成功していなくても得る便益はたくさんあるとしている。(56)

このようにセンの「機能」概念は、センがアリストテレスやマルクスの影響を受けて自らの理論を組み立てていることに関連しているが、この点が、ロールズやコーエンから批判を受ける際に問題にされる点であると筆者は考える。コーエンの批判にも耳を傾けるべき点はあるが、しかし、それを強調しすぎると、センの「機能」概念が持っている人間学的、哲学的な意義が失われてしまうと筆者は考える。

この問題は、センの「潜在能力」概念を社会関係資本論と結びつけるときにも、生じてくる。コールマンは、社会関係資本から生み出されるものを「効用」や「便益」であるとしている。しかし、筆者はセンの「潜在能力」と社会関係資本の考え方を結びつけるとき、その社会関係資本から形成されるものは「効用」「便益」としてよりは、センの「機能」概念に近づけて論じられるべきであると考える。すなわち、社会関係資本から人の価値ある「機能」がどのように顕在化してくるかという視点が重要であると筆者は考える。

以下、補論的なことを付け加えて論を終わりたい。

センの視点は個人の視点から論じられているが、集団的で集合的な行為については論及されていない。社会関係資本論においては、私的財、公共財、クラブ財という区分がされる場合があり、あとの二者においては集合的な行為や活動が関係してくる。センの「潜在能力」論は、あくまでも個人の「機能」と「行為」が中心であるが、集合的行為や活動それ自身が重要な意味を持ってくるとき、センの理論では不十分ではないかと考える。

また、これまで社会学においては、デュルケーム、パーソンズ、マートン、ルーマンの理論などのなかで機能概念が論じられてきた。しかし、それはシステムと「機能」という視点から論じられるものであった。他方、センの「機能」概念は、個人にとっての「機能」という側面から展開されるという点で違いがある。

また、社会関係資本の形成、あるいは、社会関係資本からの「機能」の生成に際して、何かの誘因、例えば援助者やアドバイスする人の存在、あるいは何らかの資源の存在があると考えられる。それがどのような性質ものであり、どのような役割を果たしているのか、これらの点を明らかにしていくことが、社会関係資本論と「潜在能力」論にとって重要になると考える。

福祉・医療の分野において「生活の質」の問題をセンの「潜在能力」論と社会関係資本と関連づけて論じる場合、この点が重要になると考える。そのような位置にあるのは専門家や援助者であり、そのコーディネーター的な役割は、障害者や貧困者などの社会関係資本の形成、その拡大を促進する上のキーマン的な位置にあると考える。

その際、コーディネーターとしての専門家、援助者の役割は、早急に「自立」を求めるのではなく、時間的の経過のなかでその人を見守り、その人の行動をすべて管理下に置くのではなく、その人が社会関係資本を形成していく過程で生じてくるハプニング性と偶然性、リスク性を尊重しながら、その人の社会関係資本の形成とその拡大を促進するように援助し、その人が本当にしたい生き方を選択していくことができる「自由」すなわち「福祉を達成する自由」を保障していくことにあると考える。福祉施設で専門家や援助者が障害者を支援することは重要であるが、それが、その人がその外に社会関係を広げ、それを社会関係資本とすることによって、その人が価値があると考える生き方を選択できる「自由」を得る機会、すなわち「潜在能力」を高める機会を知らない間に奪ったものになってしまっていてはならないのである。

おわりに

本論文では、社会学的なアプローチからアマルティア・センの「潜在能力」の概念と社会関係資本論の関連性を論じた。「潜在能力」を構成する「機能」はさまざまな財から転換されてくるものであるが、社会関係資本をそのような財の一つとしてとらえるとき、その資本としての性格を理解するためには、その前提として社会関係とはどのような特徴を持っているのかということが把握されていなければならない。そこに「潜在能力」論に対する社会学的なアプローチの有効性があると筆者は考える。社会学的な視点から社会関係資本の特徴を考えると、時間性と空間性という観点が重要になってくると考えられる。時間性の視点から見ると、可変性、予測不可能性があるという特徴があり、空間性という視点から見ると、空間的限定性、部分性、特殊性、文脈依存性という特徴がある。通用性や普遍性があると考えられる貨幣資本と比較して社会関係資本がこのような特徴を持っているのは、それが人と人との社会関係に埋め込まれているという特性を反映したものであるからであると筆者は考える。しかし、それは、他の資本とそこから引き出される「機能」の質や量の優劣を意味するものではなく、社会関係資本の特性を意味するものであり、社会関係資本は他に代替できない「機能」がそこから引き出されうる資本であると考えることが重要である。

このような点を分析していくうえで社会学的なアプローチが必要になってくると考える。しかし、筆者は、社会学は、センの「潜在能力」論をまだ十分に社会学化できていないと考える。三重野は、財が「機能」に転化する場合の利用関数に生活様式や人々の相互作用が関係してくるとしているが、これをどのように発展展開していくかがこれからの課題であると考える。本論はこのアプローチをヒントに、社会学の中にセンの「潜在能力」論を位置づける一つの試みである。

また、センの理論の背景にあるアリストテレス哲学を見ておくことは、センがなぜ「達成された福祉」ではなく、「福祉を達成する自由」を問題にするのかを理解するうえで重要である。すなわちその「機能」概念には「効用」概念にはない人間学的、哲学的な価値が込められていることを理解しその意味を考えていくうえで必要なことであると筆者は考える。

注

(1) 三重野卓　『「生活の質」と共生』　白桃書房　2000　pp.60-63
(2) 三重野卓　「成熟化現象としての『生活の質』－その機能的多様性と福祉問題―」
『季刊・社会保障研究』　Vol.24 No3 1988 p.325
(3)　同　p.326
(4)　同　p.326
(5)　同　p.328
(6)　同　p.328
(7)　同　p.328
(8)　同　p.328
(9)　同　p.322
(10) イピッド・フェルス、ジョナサン・ペリィ　「生活の質：用語の広がりと測定への視点」
ロイ I. ブラウン編　中園康夫、末光茂監訳『障害をもつ人にとっての生活の質』相川書房　2002
pp.63-72
(11) アリストテレス　出隆訳　『形而上学　下』岩波書店　1961　p.41
(12)　同　p.42
(13)　同　p.41
(14)　同　pp.35-34
(15)　同　p.34
(16)　同　p.35
(17)　同　p.34
(18)　同　p.38
(19)　同　p.33
(20)　同　p.32

(21)　同　p.26

(22)　同　pp.30-31

(23) アマルティア・セン　「潜在能力と福祉」
マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン編著　竹友安彦監訳　水谷めぐみ訳
『クオリティ・オブ・ライフ』里文出版　2006　p.60

(24)　同　p.60

(25)　同　p.60

(26) アマルティア・セン　池本他訳　『不平等の再検討』岩波書店　1999　p.71
（Amartya Sen "Inequality Reexamined" Oxford University Press, New York 1992 p.50）

(27)　同　p60　ibid.,p.40

(28)　同　p59　ibid., p.39

(29)　同　pp2-3　ibid., p.2

(30)　同　p10　ibid., p.7

(31)　同　p3　ibid., p.2

(32)　同　p11　ibid.,　p.8

(33) アマルティア・セン　「潜在能力と福祉」　p.60

(34) アマルティア・セン　池本他訳　『不平等の再検討』　pp.8-9 ibid., p.6

(35)　同　p9　ibid., p.7

(36)　同　p9　ibid., p.7

(37) アマルティア・セン　「潜在能力と福祉」　p.63

(38)　同　p.70

(39) アマルティア・セン　池本他訳　『不平等の再検討』　p.61　ibid., p.41

(40) アマルティア・セン　「潜在能力と福祉」　p.61

(41) アマルティア・セン　池本他訳　『不平等の再検討』　p.73 ibid., p.52

(42)　同　p.73 ibid., p.52

(43) コールマン　金子淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」
野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房
2006.　p.209
（Coleman,James "Social Capital in the creation of human capital" in American Journal of Sociology 94 1988 p.98）

(44)　同　p.209　ibid., p.98

(45)　同　pp.214-218　ibid., pp.102-105

(46) ロバート・D・パットナム　河田潤一訳　2001年『哲学する民主主義』　NTT出版　2001　pp. 206-207
（Robert Putnam "Making democracy work" Princeton University Press　1993　p.167）

(47)　同　p .215　　ibid p.173

(48) ナン・リン著　筒井・石田・桜井・三輪・土岐訳
『ソーシャル・キャピタル　社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房　2008　p.32

(49)　同　p.24

(50)　同　pp.35-36

(51)　同　p.27

(52)　同　p.32

(53) 稲葉陽二　「ソーシャル・キャピタルとは」
稲葉、大森他編『ソーシャル・キャピタルのフロンティア』ミネルヴァ書房　2011　pp.4-5

(54) G・A・コーエン「何の平等か？　厚生、財、潜在能力について」
マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン編著　竹友安彦監訳　水谷めぐみ訳
『クオリティ・オブ・ライフ』里文出版　2006　p.44、46

(55)　同　p.45

(56)　同　pp.42-43